

特集
高知
〜いごっそうとはちきんの国 土佐〜

Special Features
Kochi
Country of stubborn men (Igosso) and lively women (Hachikin)-Tosa

風土
Climate

「いごっそう・はちきん」を育てた歴史風土

広谷喜十郎

HIROTANI Kijuro

土佐史研究家



1—はじめに

土佐は前面に太平洋が大きく広がり、背後に険しい四国山地がそびえている。古代には佐渡や隠岐とともに、律令制で定めた三種類の流罪である三流、すなわち、近流・中流・遠流のうち最も重い刑の罪人を流す「遠流の国」として位置づけられていた。

昭和10年(1935)に四国山地を越えて高松・高知間の鉄道の全線が開通するまでの長い間、まさに土佐は「陸の孤島」であった。まともに向かってくる台風など、きびしい自然条件の中での生活を強いられてきた。

土佐の人々は、大昔から自然の猛威と戦い、手なずけながら生きてきた。『古事記』では「建依別」と呼ばれたように、猛々しく気骨のある男性・いごっそう、元気旺盛な女性・はちきんというたくましが作り出されてきた。

その後の時代変革期には、これら土佐人の情熱が時代の脚光を浴びることになる。

2—古代から中世へ

平安中期の律令の施行細則である『延喜式』によると、

古代の土佐から中央政府へ納めていた物に、「堅魚(カツオ)」「年魚(鮎)」などの水産物が数多くある。なかでもカツオ漁は沖合に出た漁業であり、当時の土佐には海洋民が多数住んでいたことが推察される。

このような、古代海洋民が集住していた「海部郷」(『和名類聚抄』:平安時代中期に作られた辞典)は、土佐中央部の西域だと言われている。さらに、『土佐日記』の紀貫之の船を土佐の荒海を超えて55日間もかけて京都まで送り届けている。また、西瀬戸内海方面での藤原純友の乱では、これに呼応する土佐人がいたし、純友軍が土佐の海域に襲来したときには、これに負けじと応戦した南海水軍の存在もみとめられる。

中世初頭には、土佐の安芸兄弟が平家の猛将・平教経と華々しく戦った有様が、『平家物語』に有名な壇ノ浦合戦のなかで伝えられている。さらに、室町時代には、土佐沖を航海する対明貿易が盛んになった。中国の揚子江河口の寧波までの南海航路が開通されており、日本最古の海上法規である『廻船式目』の末尾には、土佐の浦戸在住の篠原孫左衛門と兵庫や薩摩の船頭の3人が、

日本を代表する船頭として署名している。

文安2年(1445)の『兵庫北関入船納帳』をみると、土佐関係では41箇所の記載があつて、安芸郡甲浦が26回、奈半利が10回、その他に佐喜浜、安田、香美郡前浜の船舶が兵庫港に出入りしている。船の積載品はすべて材木であり、土佐の林産物が関西方面で大きな役割を果たしていたことが分かる。

戦国時代に、長宗我部元親をして土佐を統一させ、険しい山脈をこえて四国平定を達成させたのは、平時は農民として生活し、領主からの動員がかかると一領の具足(武器や鎧)を携えて駆けつける、一領具足といわれるいごっそうの土着武士集団であった。九州の戸次川合戦では薩摩の大軍を相手に一歩も退かず、弱冠23歳の元親の長男・長宗我部信親とともに、700人余が壮烈な戦死を遂げている。

そして、慶長5年(1660)に、関ヶ原の戦いに敗れた長宗我部氏は土佐から追放され、徳川軍が浦戸にやってきた。対する長宗我部氏の家臣たちは抵抗し、く一揆の人数都合1万7千とぞ聞こえし、討取所の首273、大将8人の首も此内なり(『土佐物語』)という悲惨な結果におわっている。

翌年、新藩主・山内一豊は相撲大会に事寄せ、一揆残党の有力者73人を集め捕えて、種崎の浜で磔刑にしている。

浦戸城跡西側の海岸には、犠牲者供養の六大地蔵や一領具足の碑、石丸神社がつくられている。

幕末に、一領具足の流れをくむ郷土層からも勤王運動に数多く参加していることを考えると、この事件が後代にも大きく影響を与えていたと思われる。

3—近世の土佐

慶長6年に、土佐へ入国した山内一豊は、大高坂山に築城を開始、総動員体制で工事がおこなわれる。同8年に本丸と二の丸が完成したので入城式をおこない、河中山と改称した。けれども、河川の氾濫に悲鳴をあげた2代藩主・忠義は、この地名を嫌って、竹林寺の空鏡上人に依頼して高智山と改名してもらった。同15年のことである。これが、現在の高知という地名の始まりである。また、浦戸湾に面して2つの河川に挟まれた三角洲地帯に城下町の建設をおこなった。高知城を囲んで、東は堀詰、西は升形の間を家臣団が居住する郭中、

町人の住むところは郭中をはさんで上町と下町が設けられた。下町の郭中に近い場所に、堺町や京町があり、呉服商人などの御用商人が住みつき、その近くには「はりまや橋」で名高くなった播磨屋宗徳という大商人も住んでいた。

2代藩主時代、家老・野中兼山が登場する。彼は、積極的な藩財政強化策を打ち出した。

まず、反抗的であった長宗我部氏旧臣の一領具足の中で、新田3町歩以上開拓した者を郷土職に取りたてた。彼らは城下町に住むことは出来なかったが、地域の指導者としての地位を確立させていった。新田開拓を大々的に実施させるためには、大がかりな用水路の開発を必要とする。物部川に山田堰、仁淀川に八田堰などを設け、荒地や台地でも水田開拓が進み、藩内各地に水田地帯が広がっていった。

さらに、兼山は藩財政の主要収入源として、藩の手によって、材木を盛んに伐り出して上方市場へ移出している。これら林産物を円滑に輸送するために、安芸郡の佐喜浜、津呂、室津、香美郡の手結、幡多郡の柏島、浦戸港で港湾改修や開発がおこなわれた。その他、殖産興業を積極的におこない、カツオ節や和紙なども上方市場へ移出している。この繁栄ぶりの名残として、現在も大阪市内中心部には「土佐堀」という地名がある。

また、思想的には、在地学者の谷時中を起用し「南学」を起こした。郷士のなかには、この学問に大きな影響を



写真3—長宗我部元親の銅像



写真1—一領具足の碑と供養塔



写真2—一領具足供養の六大地蔵



写真4—野中堀の墓



写真5—野中堀が建立した野中神社



■写真6—婦人参政権発祥之地の碑



■写真7—昔のカツオ節製造の風景

受けた者が数多くいる。幕末に活躍した勤王志士たちの精神的イデオロギーにもつながっていくのである。

約30年間続いた兼山の執政ぶりは、あまりにも急進的・強圧的であった。突然、寛文3年(1663)に失脚。翌年12月、追放された場所で急死した。それにともない、兼山の遺子たちが幡多郡宿毛に幽閉されてしまう。

元禄10年(1697)男系が絶えると、幽居を続けた娘・婉は、44歳で赦免された。高知城近郊の朝倉村に住み、医を業としながら少しばかりの扶持を受けて細々と暮らした。そして、享保10年(1725)一人寂しく66歳で没している。作家・大原富枝が『婉という女』の作品の中で、封建制の非情さの中でがんばって生き抜いた婉の心情を見事に描写している。

城下町を洪水から守るための水防体制が整備された元禄年間に、5代藩主・豊房が潮江川を鏡川と改称している。この頃になると城下町が活気を呈したので、それを反映して、現在の日曜市の源流となる街路市を城下町内に、10箇所設けることが公認されている。

この時代になると、坂本龍馬の先祖につながる農村出身の才谷屋などの中小商人が急成長し、これら新興商人の動きを見ていくと、城下町が商業都市へと大きく変遷していく過程を認めることが出来る。元禄15年の記録によると、町々では独自の踊りを持つようになり、66種類のもの踊りがあったという。

他方、土佐湾は長い海岸線を持ち、この海で、ヨサコイ節で「いうたちいかんちゃ、おらんくの池にゃ、潮吹くクジラが泳ぎよる」と歌われているように、捕鯨やカツオの一本釣りという豪壮な漁業が展開された。正徳3年(1713)、大坂の医師寺島良安が中国・明の王圻の『三才図会』にならって編んだ図説百科事典『和漢三才図会』では、土佐のカツオ節が最上であると位置づけられているほど、その品質の良さは鳴り響き、上方市場で圧倒的な地位を占めるまでになった。

また、山間部では和紙の原料となるコウゾ、茶の栽培

が一段と増加し、四国山地を越えての商品経済が発展していった。平野部でも、ヨサコイ節で“年にお米が二度とれる”と歌われるように、稲の2期作栽培もおこなわれるようになった。

4——幕末から近代へ

幕末の文久元年(1861)に、長岡郡吹井村出身の郷士の流れをくむ白札格(上士と郷士の中間)・武市瑞山の呼びかけで192名の署名を集め、土佐勤王党が結成された。その後も勤王運動に参加する人々が相次いだ。一時は、藩政を掌握するかのような勢いを見せたが、同3年に瑞山が獄舎に入牢させられた。藩の重役・吉田東洋の暗殺の嫌疑をかけられたのである。瑞山は否定し続けるが、慶応元年(1865)切腹を命じられる。妻・富は、夫が獄舎につながれるや、畳の上で就寝せず、極寒のなかでも布団を重ねなかったといわれている。

この瑞山の親戚でもある坂本龍馬が、泣き虫といわれた少年時代に、姉・乙女に厳しくしつけられて成長した話は有名である。

また、三菱の創始者・岩崎弥太郎も少年時代は暴れん坊で、とかく近所の鼻つまみ者になっていた。それを母親がきびしく鍛えた話も伝わっている。後に、大金持ちになった弥太郎は東京の料亭で豪遊していたところ、母親が内職して貧しかった折の、継ぎはぎだらけのボロボロの着物姿で弥太郎の前に、仁王立ちになった。さすがの豪放な弥太郎も、この時ばかりは頭を上げることが出来なかったという。

5——明治時代

次の明治時代を考える場合の重要な記念碑が、高知市中央公園内の立志社跡に建立されている。碑文には、く青い空、青い山、青い海、ここに若さと自由がある。明治7年高知に誕生した立志社は、この大自然を象徴して自由民権の理想を掲げ、日本の近代化のため先駆けした



■写真8—坂本龍馬の銅像



■写真9—龍馬の銅像の裏面

「自由は土佐の山間より出づ」といわれた往年を回顧して私たちは碑前に若さと自由をたたえよう」と高らかに宣言されている。

日本の民主主義運動がこの地からおこり、東洋のルソー・中江兆民、最も民主的な憲法草案を執筆した植木枝盛、板垣退助、馬場辰猪らの優れた指導者を輩出している。

また、女性が初めて政治的に進出したのは、明治11年(1878)のことである。民権集会で熱心に傍聴している一婦人の姿を『大坂日報』では伝えている。同紙では、さらに楠瀬喜多という女性が、選挙権を要求した事件を報じている。その当時、高知市に住んでいた未亡人の喜多は戸主であった。区会議員の選挙で投票しようとしたところ、女性には選挙権がないと拒絶された。それならば税金を納める義務はないはず、と税金を滞納した。それを督促されたので「税納ノ儀ニ付御指令願ノ事」という文書を県庁に提出し、男女の不平等の不条理さをきびしく追及している。

さらに、同13年には高知市上町と小高坂村が全国に先駆けて、女性に町村会議員の選挙権と被選挙権を認めた規約を制定した。だが、高知県令がこの規約を認めようとしなかった。上町町内会は、民権運動家の支援を受けて県令と対決し、3ヶ月間にわたる激しい闘争を行った。やがて、県令は屈服し、上町での女性の参政権が認められた。この動きが刺激となって、隣村の小高坂村でも参政権を獲得している。高知市上町の第四小学校の門前に「婦人参政権発祥之地」の記念碑が建立されている。

6——土佐流コミュニケーション「おきやく」

県外の人々から、土佐人の底抜けの明るさはどこから来たものか、との質問をよく受ける。その答えの一つに

「おきやく」という宴会の文化が挙げられる。

江戸時代後期あたりから、土佐特有の皿鉢料理が発展してくる。これは、なにかと祝い事の宴会の席によく出される。大皿を囲んでそれぞれ好きなだけ食べられる。床前には「生けづくり」という、生きたまま跳ねている姿を模した大鯛の刺身が頭も尾もつけて盛られている。豪勢なという感じがまず度肝を抜くとでも言おうか。海のものや山

のものが数々並ぶ。本来は、冷たくなっても味の変わらない料理を並べるのが特徴で、補充がなされる。残ったものは翌日などに、接待を手伝った者たちにあまる。

このような雰囲気の中での酒宴であるから、酒量は自然とあがっていく。やがて宴半ばになると、座興の一つ「箸拳」などがはじまる。これは一人が3本の箸を持ち、双方の箸の合計を当てる遊戯である。3本勝負で負けた方が用意された献盃を飲み干すことになっている。負けた方が飲み干す決まりなので、罰盃ともいい、酒好きにとっては負けるが勝ちといえよう。この遊戯は、大声で威勢良くリズムカルに行われる。興が乗ると宴席は歓声わきあがる。酔っぱらいの歓声なので、初めての人は喧嘩でもしているのかと驚くだろう。この遊びに興じるとますます酒量が上がリ、宴席全体が騒音のるつぽと化する。皿鉢料理と箸拳遊びがあるから「土佐は酒呑みの国」だと言われてしまうのである。

酒呑みは殿様も同様である。12代藩主・豊資が酒席に出された「カツオの塩辛」のおいしさに酒がすすむので、以後「酒盗」と名付けたと言われる。これは、現在でも「酒盗」という商品名で販売されている。

7——土佐の未来

昭和初期の大不況の、大学を卒業してもろくに就職できない時代に、大学生や就職浪人の若者たちが集まり、酒を飲みながら何かと語り合っているうちに「日本一大きい坂本龍馬の銅像を造ろう」ということになった。今でこそ数ある幕末の英雄の中でも最も高い人気を誇る龍馬だが、当時はあまりよく知られていなかったにも係らずである。さっそく募金活動をはじめたが、大口の寄付は断り、自分たちの手によって、昭和3年(1928)に建立した。

そして時代は流れ、今も太平洋に向かって悠然と立つ龍馬の像が、若者たちの未来を導いているようである。「日本を今一度、洗濯いたし申し候」と。